

Report on the Villages in North China (8) : The Shanxi Province Villages in August 2013

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36846

華北農村訪問調査報告(8)

—— 2013年8月、山西省の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

2013年8月12日～26日のほぼ2週間、中国の北部を訪問した。そのうち、前半のほぼ1週間は山西大学中国社会史研究センターとの共同研究として山西省農村における聞き取り調査を行い¹⁾、後半は山西省に隣接する陝西省の西安市(かつての長安)と延安市(中国革命の聖地)を訪問して近郊農村を参観した。

今回は、山西省P県D村における聞き取り調査の日数を例年より若干少なくして、山西省農村との比較のために、陝西省農村参観に少し時間をかけることにした。また、山西省P県D村における聞き取り調査の前後には山西大学中国社会史研究センターにおいて档案資料調査を行った。

山西省P県D村における聞き取り調査は、2008年12月以降、これまでにすでに6回に及んでおり、D村の村民との間には一定程度の信頼関係が生まれてきたためか、我々に対する警戒心はほとんどなくなったように感じられ、村内における聞き取りも非常に順調に行うことができた。

なお、本稿においても、前稿までと同様に、主に煩雑さを避けるために、原則として、敬称を省略するとともに、資料からの引用部分も含め、常用漢字と算用数字を用いることにした。また、前稿までと同様に、プライバシー保護の観点から山西省P県D村における聞き取り内容については、実名・村名などを伏せることにした。

I 山西省P県D村

今回、山西省P県D村における聞き取り調査に参加したのは、日本側が内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・古泉達矢・河野正・佐藤淳平(年齢順)と今回初めて参加した菅野智博(一橋大学大学院生)及び部分参加(8月14日～16日)となった阿古智子の計9人で、一方、山西大学側が郝平(8月14日午前のみ参加)・馬維強・李嘎・趙中亜と主に通訳を担当していただいた毛来靈・孫登洲の計6人だった。今回も、総勢15人のやや規模の大きな調査団となった。

(1) HH

聞き取り日時：8月14日(水) 15:10～17:15、8月15日(木) 9:05～11:00

聞き取り場所：HH宅

聞き手：弁納才一・毛来靈

通訳：毛来靈

写真1. HH氏の邸宅



HH宅を訪問すると、同氏は昼寝中だったが、すぐに起き上がり、たまたま家にいた同氏の次男が暑かろうと気遣って扇風機をつけてくれた。また、聞き取りの途中で、同氏の長男もやってきていろいろと補足的説明もしてくれた。なお、HH宅は新築であろうか、非常に綺麗だった(写真1を参照)。

家族

- ・父(HHS, 亥年生れ)は、晋南の曲沃県へ単身赴任して曲沃煙廠(曲沃タバコ工場)で働いていた。
- ・母(WYE)は、NZ村の出身で、土地改革前、単身赴任していた父(HHS)に代わって、本村で10畝余りの土地を耕作していた。
- ・兄弟姉妹は、6歳下の妹(HCY, 戌年生れ)が1人いるだけで、今年で80歳になったが、22歳頃にLG村(本村より東北へ15里余り)へ嫁した。
- ・妻(LXZ, 旧暦1928年2月14日・辰年生れ)は、XN堡村出身で、18年前に死去した。
- ・子供は、長男(HCZ, 1954年・午年生れ)・次男(HCZ, 1968年・申年生れ)・長女(HJX, 1951年・辰年生れ)・次女(HYX, 1957年・酉年生れ)・三女(HFX, 1960年・子年生れ)・四女(HZX, 1962年・寅年生れ)・五女(HRX, 1969年・戌年生れ)がいる。
- ・長男(HCZ)は、1984年(?)、父親である自分(HH)の後を継いで(「頂班」)曲沃煙草会社に勤務していたが、1988~98年、同会社が昆明にある煙草会社に吸収合併されて閉鎖したので、P煙草会社に勤務するようになった。現在、長男夫婦はP県城内のマンションに住んでいる。そして、長男の子供としては、長女(HWJ, 戌年生れ, 31歳。湘潭大学を卒業した後、入社試験に合格してP煙草公司に入社した。その夫はP県城内の「聯通」に勤務し、県城内に住んでいる)・次女(HWR, 丑年生れ, 28歳未婚。天津の大学院を卒業した後、太原の銀行に勤務している)・長男(HWY, 1988年・辰年生れ, 未婚。榆次の山西省職工技術学院で学び、太谷の養鶏場で獣医をしている)がいる。
- ・次男(HCZ)は、本村で農業に従事している。父親(HH)と同居しながら、父親と兄(HCZ)に再分配された土地も一手に引き受けている。そして、

次男の子供としては、長男(HFY, 酉年生れ, 21歳。太原の美術学校の3年生で、毎月1,000元を仕送りしている)・次男(HFS, 戌年生れ, 20歳。「木雕」の仕事している)・長女(HFX, 戌年生れ, 20歳, 次男との二卵性双生児。P県城内の靴屋で靴を販売している)がいる。

個人史

- ・旧暦1928年2月25日・辰年生まれで、今年で86歳になった。
- ・13歳頃(?), D小学校に入学し、3年間くらい学んだが、中退し、1945年10月頃(16歳)から曲沃煙廠で働き始めた。仕事の内容は、原料の乾燥葉煙草を買い取って(「取購」)、等級を決め、計量した上で記録し、倉庫に保管することだった(「保管」)。周辺の葉煙草栽培農家が麻袋に入れた乾燥葉煙草を馬車に積んで持ってきたものを買い取るか、あるいは、工場内の担当者が鉄道に乗って全国各地の葉煙草栽培地に買い付けに行った。工場の宿舎に宿泊し、当初は給料は出なかったが、食事と宿舎が無償で提供された。工場の食堂では、山西省南部に位置する曲沃が小麦の主要な生産地だったため、主に「白麵」(小麦粉)を食べた。
- ・1947年、紹介によって結婚するために、P県に戻って結婚式を挙げ(費用は数円で、宴席は3つのテーブルが用意された)、1年間くらいは本村にいた。
- ・1950年からは、毎月、報酬として1斗(30斤)の小麦粉をもらうようになった。
- ・1956年からは給料をもらうようになった。後に、「高級工」(「保管」の主任)になると、数十元の給料をもらうようになった。毎月、受け取った給与のうち40元を本村にいる妻に送り、10元余りを生活費(食費や宿舍費など)にあてた。そして、夫婦2人が都市戸籍(「城市供应戸口」となり、工場の宿舎の1室にいっしょに住んだこともあったが、1962年には政府の政策によって妻と子供の戸籍は農村戸籍に戻されて本村で暮らすことになって、自分だけは再び数人が雑居する宿舎(単身者用の部屋)に住むことになった。
- ・1960年、3年困難時期の中でも最も苦しかった。食糧の配給は小麦から甘薯へ代わり、配給量も少なくなった。

- ・1981年、本村の中心部から現在の家に移って来た。旧来の家の敷地は狭く、子供たちが成長して家族の人数が増えると、手狭になったので、近隣の人(現在の戸主はWJXで、50歳代)に売って、かつて畑だったところ(敷地面積は0.6畝)に新たに家を建てた。さらに、4年前、自宅を建て替えた。
- ・1984年(53歳)、病気のため退職し、本村に戻ってきた。その時、8級の労働者で、月給は56元だった。本村に戻ってからは、農作業をやっている。1984年に糧票で購入することができる白麵(小麦粉)の割合は、曲沃では60%だったが、P県では40%だった。
- ・1986~87年(56~57歳頃)、曲沃煙草公司に呼び戻され、モンゴルへの輸出用煙草の生産にかかわる「保管」業務に従事した(経験があることと人材不足だったため)。
- ・テレビはあまり見ず、よくラジオを聞いている。特に、ラジオで晋劇を聞くのを楽しみにしている。曲沃の煙草工場には劇場があつて晋劇を無料で見るのができたし、妻も晋劇が好きなので、いっしょに廟会に出かけて晋劇を見たこともあつた。
- ・80歳以上の老人は政府の「老年津貼」(老後の年金以外の補助金)を年2回もらえるようになったが、最近になって、本村内の放送によって以上のようなことを知って、手続きを始めた。長男(HCZ)が父親のために、自分の仕事を休んで、その手続きをしているところだった。

曲沃土煙廠

- ・曲沃煙廠(後の曲沃煙草公司)は100年以上の歴史があり、1945年末に閻錫山軍が曲沃にもやって来た(曲沃は1947年に解放された)。第二次国共内戦中は煙草がよく売れ、内戦の影響はほとんどなかった。1945年、働き始めた時、当時の総経理(社長)は、父親(HHS)の知人のWLSというP県BNの人だった。彼はもともとは父親と同じく同工場の労働者だった。1956年、公私合営となり、まもなくして国有化され、政府・党から工場長が派遣されてきたので、WLSは副工場長に降格した。そして、1957年以降は、生産隊を通して原料葉煙草を購入するようになった。文革が始

まった1966年には3か月ほど、工場の操業が停止した。中学・高校の生徒だけで結成された紅衛兵が工場長・書記を走資派だとして批判したが、破壊活動をするとはなかった。自分も含めて、工場内の労働者は紅衛兵の運動にはほとんど参加しなかった。文革中も煙草の生産はほぼ一定して安定していた。

- ・工場の正規労働者は、全て男性で、働き始めた1945年に100人ほどだったが、退職した1984年には700人くらいになっていた。労働者の出身地は、晋南が最も多く、これにP県、さらに河南省がついでいた。ただし、同室の人はほとんどP県人だった。年に1回、農繁期に実家に帰るための休暇をとることができたので(「採親仮」)、P県に戻って来た。その時期、工場では、地元の曲沃の農民(若い男性)を臨時工として採用していた。また、1年を通じて臨時工として雇われていた地元の曲沃の若い女性は、乾燥葉煙草の中央の固い部分(芯?)を取り除く作業をしていた。その女性たちの賃金は1日1元だった。
- ・葉煙草の買付方法には2つあった。1つは、曲沃の葉煙草栽培農家が、自ら乾燥葉煙草を麻袋に詰めて馬車で工場まで持って来たのを買い取る方法で、工場側がその等級を査定して買い取った。もう1つは、鉄道を利用して葉煙草の生産地まで出かけて行って買い付ける方法で、河南省・山東省・雲南省・貴州省などの葉煙草生産農家まで行って直接買い付けることもあった。その際は、買付人が等級を査定した。
- ・曲沃のおいしい食べ物としては「聞喜煮餅」があった。実は、聞喜県の「煮餅」が最も有名だったが、曲沃で作られたものも「聞喜煮餅」と呼ばれていた。聞喜県産の「聞喜煮餅」の原材料は、白糖・紅糖・白麵(小麦粉)・胡麻で、油で揚げた。聞喜県産の「聞喜煮餅」は曲沃県産の「聞喜煮餅」より0.2~0.3元ほど高かった。いずれにせよ、曲沃や聞喜は小麦の生産が盛んなところだった。冬小麦を収穫した後に、煙草を栽培して晩秋に収穫していた²⁾。
- ・人民公社時代は、曲沃煙草会社の供銷科には会計・出納・統計・採購(買付担当者は「採購員」)・保管の担当があり、採購員は出張手当などが支給されるために、手当が少し多かった。

(2) LYZ

聞き取り日時：8月15日(休) 15:05～17:00

聞き取り場所：LYZ宅

聞き手：弁納才一・毛来靈

通訳：毛来靈

家族

- ・父(LXM, 1958年に65～66歳で死去)は、P县城NLJ村(本村より約20里)に生れたが、解放前に母(WMY)の実家である本村に住むようになった(その事情は後述)。北京で顔料を売る商店で店員として働いていた。1952年、病気のため、本村に戻り、互助組に参加し、農業に従事した。なお、土地改革では12～13畝の農地を分配された。
- ・母(WMY)は、本村人で、1961年に60歳代で死去した。
- ・兄弟姉妹は、第1人と3人の妹がいる。弟(LYH, 61歳)は1952年に本村で生れ、チベットの格尔木(一番上の妹夫婦について行った)の高校を卒業した後、青海の玉門油鉞に勤務した。一番上の妹(LYX, 75歳, LJ村で生れる)は、軍人と結婚してチベットの格尔木で暮らしている。2番目の妹(LFX, 74歳, LJ村で生れる)は、YLZ(本村から約10里)の農民に嫁した。3番目の妹(LSX, 58歳?, 本村で生れる)は、XYJ村へ嫁した。
- ・妻(WFY)は、本村人で、今年で75歳になった。
- ・子供は、長女(LYC, 49歳, DYJ村の梁に嫁す。夫(梁)の親戚が本村の隣家に住んでいたの、紹介された)・長男(LLC, 43歳, 妻のHGMはNZ村の出身で、43歳。詳細は後述)の一男一女である。

個人史

- ・1937年(1935年?)旧暦11月29日(子年)にLJ村で生れたが、第二次国共内戦期にP县城一帯はゲリラ地域だったので、母親の実家があった本村へ避難した。
- ・12～13歳(1948～49年?), D小学校に入学し、3年間学んだ。
- ・17歳(1953年), 父方の親戚の紹介により、P县城内東街の主に鍋を作る

鉄廠で学徒として働き始めた。同工場は、1955年に公私合営となり、別の工場ともに規模の大きな機械工場(P県城西門)に吸収合併された(労働者は合わせて約80人)。現在、この工場はP柴油機廠となっている。

- ・1956年、人民解放軍(0208部隊)に入隊して石家で歩兵として勤務したが、1959年には再び同上の工場に戻った。
- ・1961年、3年困難時期で給料が少なくなったので、工場を辞めて本村に戻ってきた。間もなく、武郷県で煉瓦作りの臨時工となり、かつて鉄廠で働いた経験があったので、火の管理を任された。給料は、当初は月60元だったが、技術を習得して人民公社に雇われるようになると、100元になった。
- ・1963年(28歳)、隣家(W姓)の紹介で結婚したが、本村出身の妻を本村に残して外で働いていたので、農作業は生産大隊にお金を支払って耕作してもらった。
- ・1997年(60歳)、本村に戻った。それ以前に息子が結婚したが、現在の自宅の購入費や息子の結婚費用などを含めて約1万元を用意することができたのは、同上の工場で長い間働き、比較的高い給料をもらったおかげである。

学徒(P県城内東街の鉄廠にて)

- ・当初、学徒をやっていた時は月給が7元にすぎなかったが、食費と宿舎費は不要で、茶葉や砂糖などをもらったり、服も年に1着支給された。
- ・労働者は全部で30人くらいいたが、大部分はP県人だった。ただし、料理を作る人(食堂のコック)は河北省人だった。また、宿舎には1室に12～13人が住んでいたが、そのうち学徒は4～5人だった。

乳牛の飼育(長男)

- ・長男(LLC)は4頭の乳牛を飼育し、毎日、牛乳をバイク(8年前に2台購入し、今年20歳になった孫のために1台購入した)に積んでNZ村の常連客のところに売りに行く(毎日、約60kg。1斤で2.4～2.5元)。以上の他に、約30斤を本村内の隣家などに売っている。

- ・12畝の土地に主に玉蜀黍を栽培し、乳牛の飼料とし、さらに、不足分の玉蜀黍を購入している。また、同じく飼料として「棉子餅」(棉実油の搾りかす)を購入している。この玉蜀黍の栽培を自分(LYZ)が担当している。そして、主食の小麦粉を商店で購入している。

靴下作り(長男の妻)

- ・1982年に長男(LLC)が結婚した後、その妻(HGM)が出身地のNZ村でやっていた靴下作りを自宅でやるようになった。靴下作り用の縫製機械はP県城で約1,000円で購入した(写真2を参照)。靴下作りは隣家の女性と2人で共同作業で行う(訪問した日は、隣家の女性の都合がつかず、隣家の女性が来ることができず、作業もできなかったことから、自宅の中庭でマージャンをしていた)。
- ・靴下の材料はNZ村の人(家内工業として半製品を作っている)が持ってくる。1袋に100ダース(1,200足)入っている(写真3を参照)。靴下の縫製作業が終わったものを再び袋に詰めてプリントの作業をする人に手渡し、完成品は工場へ届ける。なお、手間賃は工場から1か月分の現金を手渡しで受け取る。

写真2. 靴下作り用の縫製機械



写真3. 靴下の材料(半製品)



(3) WSQ

聞き取り日時：8月16日(金) 9:15~11:00, 8月16日(金) 15:20~17:10

聞き取り場所：WSQ宅

聞き手：弁納才一・毛来霊

通訳：毛来霊

家族

- ・父(WZ, 50歳代で死去)は、長男だったが、住み込みでP県城の永恒銀行の「掌櫃」をやっていた。1937年、日本軍が入城し、当該銀行を砲撃して破壊したので、難を逃れて本村に戻ってきた。父の2番目の弟(WJ)は太原で商店(靴屋)を開いており、3番目の弟(WZ)は本村で商店(主に小麦粉・小米などの食料品を販売していた)を経営していたが、体が弱く、農業ができなかったため、自分がよく農業を手伝った。
- ・母(BYX, 1967年に74歳で死去)は、XN堡の出身だった。
- ・兄弟は、WSJ(84歳、詳細は後述)とWSB(80歳)の2人の弟がいる。WSBは、P柴油機廠で「冶煤工」をやっていた。その妻は本村人だったが、夫婦ともに「城市戸口」を得て、現在でもP県城内に住んでいる。一方、WSJは「城市戸口」だが、その妻は本村にとどまっていたので、「城市戸口」を持っていないため、退職後は本村に住んでいる。
- ・妻(LGR, 本村人)は、身体があまり丈夫ではなかったため、「細女」というあだ名を付けられ、数年前にベッドから落ちてから病気になり、3年前に死去した。
- ・子供は、二男三女で5人いる。長男(WJP, 50歳代)は、本村で鍛冶屋をやっており(月給約5,000元)、本村人のWSJ(年上)と結婚し、家を新築した。次男(WJX, 46歳?)は、本村で建築関係の仕事をしており(日給約200元)、HG村のHXL(1つ年下)と結婚した。長女(WFE, 巳年生れ, 59歳)の夫は、KJ庄で建築関係の仕事(「泥匠」)をしており、次男(WJX)に技術指導している。次女(WCF, 卯年生れ, 40歳代)の夫は、本村人で、P柴油機廠に勤務していたが、倒産したため、現在は個人経営の柴油機廠で働いている。三女(WYH, 午年生れ, 30歳代)は、夫とともに包頭で演劇の仕事(俳優)をしている。

個人史

- ・1928年に生れ、9歳(1937年)で小学校に入学し、3年間学んだ。日本兵が八路軍の先生を殺して日本語の教科書を使用させた(教師は東北出身の中国人だった)。
- ・12歳、家で農業(15.8畝の土地を所有。土地改革時は「中農」と規定された)・家事の手伝いをしていた。主に高粱・玉蜀黍を栽培し、主食として消費した。
- ・15歳頃、太原の商店(鏡屋・ガラス屋)で、ガラス窓の修理をする仕事に従事した。
- ・16歳(1944年)、太原市鐘樓街の商店(おじのWJの店)で店員として働き始めた。食事は主に粟が無料で提供された。そして、夜は、その店内で寝た。ただし、6月末から年末までの給料は5元だった。
- ・18歳、おじのWJとともに閩錫山軍に強制的に入隊させられ、常備軍の「山砲」(砲兵)となった。その時の給料は約40万元だったが、その価値はハイパーインフレによって小遣い程度にしかすぎなかった。なお、友人のWGTは、皇協軍(日本軍に協力する中国人部隊)に入隊させられて、P皇城門の站崗(守衛)をやらされたと聞いている。
- ・20歳(1948年?)、北営(本村から20里)で激戦があり、仲間の砲兵はほとんど死に、自分だけが生き残り、八路軍の捕虜となったが、「羊毛病」(皮膚病・伝染病)という病気に罹ったので、釈放されて本村に戻ってきた。
- ・1949年、解放時、40日間、解放軍の要請に従って担架隊となって本村から太原へ派遣された。
- ・1950年、本村で農業に従事したが、その後、互助組には参加しなかった。
- ・1955年、結婚した後、WHといっしょに恐固社(初級合作社)を結成し、責任者となった。1956年から第5生産隊長となった。
- ・1960年、本村では107人が餓死した。この時期、生産隊長の主要な仕事は埋葬などの死者の始末だった。また、人民公社の赤豆を盗んだのが見つかって、WXRにびどく怒られた。
- ・1961年以降、副業に力を入れるようになって農業はあまり熱心にはやらなくなった。その副業とは、積載量2^トの馬車(4頭の馬を2人で馱す

る)で石炭を靈石から介休駅まで運搬する仕事で、1日2往復した。靈石県の運送会社の書記(TYL, 本村出身)と知り合いだったので、仕事を依頼された。2～3台の馬車があり、馬の飼育係が1人、貨物(石炭)の積み込みと積み下ろしの係が各1人、馭者が2人、料理人が1人、会計・経営が1人(WSQ)いた。

- ・1980年、本村にあった10の生産隊が5つの村民小組に再編された。4人分(夫婦2人と次男夫婦2人)の土地を再分配されて計7.2畝の土地を請け負うことになった。現在、アルカリ土質の土地は主に村の西部に多く、村有農地として分配しようとしても、村民は受け取ろうとしないので、そこには新しい家を建てるようになっている。
- ・玉蜀黍を植えているが、全部販売しており、数千元になる(1畝当たり12,000～13,000元分の収穫がある)。これらは飼料となり、LH集团公司の人が買付けに来る。主食の白麵(小麦粉)は購入している。また、トマトを商店で購入して、トマトソース(麵にかける汁)を作って自家消費している。
- ・現在、若い人は農業に従事しなくなった。外で働き、本村の女性を雇農として雇っている例が多い。女性の雇農は1日60円で雇うことができる。男性の場合は、1日100元以下では雇うことは難しい。

太原の東興時鞋店

- ・太原の東興時鞋店には、店の後ろ側で靴を作っている「師傅」が5～6人いて(本村のHLG以外は山西省交城県の出身者)、販売員は4人いた(会計が山西省汾陽の出身で、河北省出身者が2人)。
- ・仕事をして2年目は、旧暦正月5日に店主の「講官話」があり、靴を作る職人として新たに若い人(交城県人)が採用され、また、会計をしていた汾陽出身の人が首を切られたので、その替りに会計になり、少し給料があったが、いくらだったかは忘れた。
- ・戦時中、よく日本兵を見かけた。店にもよくやって来た。当時、店の隣に「吉川久子敬」という日本人(中国人名は角文吉)の歯医者が住んでいて、閻錫山と同級生だったことから、閻錫山の歯を治療したことがあったという。

(4) WSJ

聞き取り日時：8月19日(月) 9:10~11:05, 15:35~16:45

聞き取り場所：WLP(長男の妻)の実家, WSJ宅

聞き手：弁納才一・毛来霊

通訳：毛来霊

家族

- ・父(WZ)の兄弟は、弟(WZ)が一人いるが、WZが先妻との間に生れた子供で、WZが後妻(王姚氏, WJ庄出身)との間に生れた子供だった。おじのWZはP県城の全福永で麵粉(小麦粉)などを売っていたが、日中戦争が勃発すると、本村に戻って農業をやるようになった。
- ・祖父(WTY)は、馬車牽きをしており、また、その兄(WTZ, その妻は大奶奶と呼ばれていた)は商人で、その子供としてWJ(本村で農業)・WR(本村で農業)・WH(本村頭道街の道生当という質屋で店員をしていた)がいた。
- ・妻(LKZ, 牛年生れ, 77歳)は、XN堡出身で(詳細は後述)、結婚した時は18歳だった。
- ・子供は、二男二女である。長女(WLE, 未年生れ, 59歳)は、結婚した後、その夫の職場である臨汾市鋼廠(機械分廠)に務めたが、55歳で定年退職した。その夫(FJP, 未年生れ, 59歳)は、P県WJ庄の出身で、その母親の姉妹(本村に嫁していた)の紹介で結婚した。長男(WJM, 戌年生れ, 55歳)は、本村で個人で「木匠」をやっている。その妻(WLP, 亥年生れ, 54歳)は、本村出身で、農業に従事している。次女(WLY, 寅年生れ, 51歳)は、本村のTXM(卯年生れ, 50歳, 大型トラックの運転手)に嫁した。次男(WJZ, 巳年生れ, 48歳)は、「頂班」で太原の味精廠(太原味精調味廠)に勤務している。その妻(JDX, 巳年生れ, 48歳)は、太原市出身で、会社で知り合って結婚した。
- ・長男(WJM)の子供は、一男三女である。長女(WWJ, 子年生れ, 30歳)は、太原市南寨村のGYG(32歳, 農民)に嫁した。次女(WWJ, 28歳)は、太原市北河湾で料理人(店員?)をやっているLBL(28歳)に嫁した。三女(WWT, 24歳)は、太原で大鋼の看護師をやっており、未婚である。長男

(WWK, 20歳)は、運城の水利学院で学んでいる(2年生)。

WSJの個人史

- ・1930年に生れ、今年で84歳になった。
- ・日中戦争中だったために、正式には小学校に入学して卒業していないが、本村の数人の子供がP県城出身の郭先生(村で雇った教師)に「百家姓」「千字文」などを教えてもらった。また、戦時中、日本語の教科書で勉強させられた(日本語の単語をいくつか覚えている)。さらに、戦後は、八路軍の教科書(字を判読するのが難しいくらい、ボロボロの紙だった)も配布された。なお、八路軍が持ち込んだ西北銀行の銀行券もボロボロだった。
- ・16歳(1948年)の冬、父といっしょに太原に行き、まず姑夫(父の妹の夫)のZSW(P県L村出身)のところに身を寄せた。その姑夫は、「晋生泰」で働いていた。そもそも、太原市開化寺にあった「逢盛全」(醤油工場、主に醬豆腐を生産)の一部の人々(株主となった姑夫を含む)が太原市早西門に「晋生泰」を立ち上げた。
- ・1949年、10か月間、太原市が解放軍に包囲され、食糧不足に陥ったが、同工場には原料の小麦粉が大量にあったので、食糧不足に苦しむことはなかった。太原市内では餓死者が発生したと聞いている。
- ・1956年、公私合営を実施する中で、晋生泰など53軒の工場を合併して新星食品醸造廠と改名したが、この年以降、「薪金制」(供与の現金支給)となった。
- ・1959年、上記工場の一部が「調味加工廠」として大北門に新設された。さらに、1960年、「大康味精廠」を新設し、そこで退職まで働いた。
- ・1982年(53歳)、病気のため、退職し、本村に戻ってきた。

仕事と生活

- ・太原の醤油工場の宿舍は、2人部屋で、相部屋の人は10歳年上の文水県出身者だった。彼はもともと北京で働いていたが、実家により近い太原へやってきて会計の仕事をしていた。彼は、娘(末っ子)に「頂班」したが、

それは息子たちはすでに就職していたからであるという。

- ・同工場の職員の中には、数人の株主がいた。また、「掌櫃」を務めていた郭(P皇城出身)は、株は持たず、経営に専念していた。
- ・若い頃は、「推車」(台車)で得意先に醤油を届ける仕事をしていた。最初の給料は、インフレで紙幣価値が下落していたので、銅銭を受け取った(毎月、銅貨3枚すなわち3元)。後に、月給50元余りをもらうようになると、妻子になるべく多くのお金を仕送りするために、食費を20元以下に抑えるように努力した(食事は基本的には工場の食堂で食べた)。そして、解放直後は、「供給制」が採用されて、毎月、小米(粟)を90斤支給され(食費・宿舍費は無料)、社長は160斤支給されていた。
- ・1960年は、「3年困難時期」の中で最も食糧事情が悪かった。毎月、配給された食糧(そのうち白麵が2斤)は、幹部が28斤だったのに対して、一般の労働者は36斤だったが、さらに1斤を減らすという政策が実行された。
- ・1962年、工場には約200人の労働者がいたが、都市人口の圧縮政策のために、陽曲県や清徐県などの太原市近郊農村出身者(5～6家族)を農村へ帰らせた。

LKZ(WSJの妻)の実家の家族

- ・父(LSS)の父は農民だったが、父は天津の薬剤会社に勤務していたので、あまり父親の顔を見ることはなかった。この仕事は、長男である兄(LKX)が「頂班」した。一方、母(李李氏, XN堡出身, 纏足)は、綿糸を紡ぐことができた。また、祖父が28歳で死去したので、祖母(姥姥laolao第3声, 方言ではbaibai第3声)は、纏足をしていたが一男一女を1人で育てた。
- ・3人の兄, 2人の姉, 1人の弟, 1人の妹の計8人兄弟だった。1番上の姉(LXQ)は、本村のHWY(死去)に嫁したが、すでに死去した。1番上の兄(LKX, 丑年生れ)もすでに死去し、その妻(DYY)は本村の出身だった。上から2番目の兄(LKQ, 酉年生れ)もすでに死去しており、その妻はXZ出身だった。上から2番目の姉(LXY, 羊年生れ)は、HJへ嫁したが、すでに死去している。上から3番目の兄(LKJ, 戌年生れ)は、P皇城に居

住しながら、農業に従事しており、その妻はP県城南門外の出身だった。妹(LKY、卯年生れ)はP県城の「木匠」(工場労働者)に嫁した。弟(LKM、午年生れ)はすでに死去しており、その妻は臨島の出身だった。私(LKZ)は9歳から小学校で2年間学んだ。

II 山西省訪問地

(1) 靈石県南関鎮溝峪灘村

今回、溝峪灘村では3人の老人に来ていただいたので、3つのグループに分かれて簡単な聞き取り調査を行った。場所は、前回と同様に、新築の溝峪灘小学校の給食室のようなところだった。今回は、前回よりもリラックスした雰囲気の中で聞き取りを行うことができた。なお、筆者のグループ以外の2つのグループの聞き取り内容についてはそれぞれ祁建民と田中比呂志が整理することになった³⁾。

聞き取り日時：8月17日(土) 10:10~11:20

聞き取り場所：溝峪灘村小学校

聞き取り対象者：李治全⁴⁾(写真4を参照)

聞き手：弁納才一・毛来靈・李夏・趙中亜・古泉達矢
通訳：毛来靈

家族

- ・父(李銘金)は、1915年・巳年生れで、すでに死去した。また、母(李計林)は、1917年・未年生れで、南関鎮の出身で、やはりすでに死去している。
- ・妻(楊巧林、子年生れ、66歳)は、桃紐の出身である。
- ・兄弟姉妹は、長男(李治学、1941年・巳年生れ、73歳、本村に居住)・次男(本人)・長女(李虎愛、

写真4. 李治全



寅年生れ、64歳、本村の農民の王啓榮に嫁す)・次女(李双愛、1957年・酉年生れ、56歳、靈石県南関鎮で「打工」をしている牛廼家に嫁す)・三女(李三愛、1962年・卯年生れ、51歳、堡子堂の史興旺[石炭工場で「打工」をしている]に嫁す)である。

個人史

- ・1946年・戌年生れで、今年で68歳になった。
- ・7歳(1953年)、溝峪灘村の小学校に入学し、14歳(1960年)で卒業した。この年は3年困難時期のうちでも最も食糧事情が厳しい年だったが、本村では餓死者はいなかった。当時、村民は約300人だった。
- ・食糧事情が厳しかったので、中学には進学せず、小学校を卒業した1960年から農業に従事した。本村にあった3つの生産隊のうち、第3生産隊(当時の隊長は王吉林、副隊長は李戦清で、ともにすでに死去)に所属した。蔬菜を栽培する以外に特に副業はなかった。
- ・1986年から2013年現在まで本村の会計を務めている。

集団化時期の状況

- ・本村は、「蔬菜基地」に指定され、トマト・胡瓜・茄子・蕪(カブ)・人参・大根・白菜・「芥菜」(漬物用)・甘薯などを多く栽培していた。これらの蔬菜を「平車」(二輪車で1頭の驢馬で牽く)で富家灘にあった「蔬菜站」へ運んだ。そして、「糧站」で1年に1回まとめて主食となる玉蜀黍を受け取った。
- ・主要な食糧は玉蜀黍で、「玉菱麵」(窩窩頭)にして食べ、「白麵」(小麦粉)は少なかった。また、豆類のうち、大豆や緑豆は食用だが、黒豆は羊の飼料だった。
- ・第3生産隊では、羊の他に、7～8頭の牛ないし驢馬を所有していた。飼料には主に「麩子」(フスマ)が用いられた。
- ・富家灘の炭鉱は公有企業だったので、家庭で用いる石炭は民間の小さな炭鉱から各自で購入した。
- ・1980年前後、人民公社の解体に伴い、生産隊が消滅し、1人当たり0.2畝(良い土地の場合。ただし、良くない土地の場合、少し広くした)の土地

を再分配した。また、生産大隊は村になったが³、生産小隊が村民小組となることはなかった(村落の戸数が少なかったため)。

現況

- ・炭鉱の採炭量が減り、労働者が少なくなって蔬菜の消費量も減ったので、蔬菜の栽培も減少した。こうして、蔬菜に代わって玉蜀黍を栽培して売ることになった。そして、主食の「白麵」(小麦粉)を商店で購入している。これは、玉蜀黍と小麦粉の価格が逆転したためである。一方、本村の山の方では穀物の作付はやめて、リンゴや棗などの果樹の作付に転換している。
- ・現在、本村の人口は約480人(179戸)だが⁴、農業に従事しているのは50歳以上の人で、若い人を中心にほとんどが「打工」をやっているが⁵、女性で「打工」をやっている人は少ない。

(2) 霍州市汾河

霍州市水利局局長の張愛国の案内により、護岸工事の現場を見学した後、工事の工程に関する説明を受け、簡単な質疑応答が行われた。以下では、筆者が質問した内容を簡単にまとめることにした。なお、内山雅生及び祁建民の質疑応答の内容については祁建民がまとめることになっている⁵⁾。

聞き取り日時：8月17日(土) 14:40~15:15

聞き取り場所：汾河沿岸の工事請負企業仮設事務所

聞き取り対象者：張愛国

聞き手：内山雅生・弁納才一・祁建民

通訳：孫登洲

- ・技術レベルを保証するために、工事を請け負った企業では、日中は作業をして、晩には作業員の訓練・教育を行っている。
- ・張霍州市水利局局長は工事の総責任者・総管理者・総監督者であり、安霍州市水利局技師は工事の安全を含む技術面に関する総責任者である。

Ⅲ 陝西省

かつて山西省の東部に隣接する河北省の農村には参観したことがあったので⁶⁾、今回は山西省西部に隣接する陝西省の西安市と延安市の近郊農村を参観して比較することにした。なお、西安市から延安市へ移動する途中の陝西省洛川市近郊農村にはリング畑が一面に広がっていた。また、土埃か砂埃かは不明だが、車のフロントガラスがうす汚れており、空も少しどんよりとしているように見えた。

なお、陝西省の参観者は、内山雅生・弁納才一・祁建民・田中比呂志・古泉達矢・河野正・佐藤淳平(年齢順)の7人である。

(1) 西安市

8月21日(水)、西安の飛行場から西安市内のホテルまで移動していると、道路の両側はほぼ玉蜀黍が栽培されていた。

翌8月22日(木)、半坡村遺跡を展示している半坡博物館(写真5を参照)、1936年12月に勃発した西安事変の舞台となった驪山(写真6を参照)、秦始皇帝陵博物館の兵馬俑(写真7を参照)などを参観するために途中通過した農村では、柘榴の栽培が非常に盛んだった。秦始皇帝陵博物館の入口付近の路上では、付近の柘榴栽培農家の婦人たちだろうか、柘榴を竹籠に入れて売っていた。

写真5. 半坡博物館



写真6. 驪山「兵諫亭」



写真7. 秦始皇帝陵博物館兵馬俑



(2) 延安市

8月23日(金)午後、清涼山にある延安革命根拠地(写真8・写真9を参照)と新築の延安革命記念館(写真10を参照)を参観したが、7月に降った大雨の影響によって延安市各地で土砂崩れが発生して甚大な被害が出ており、清涼山の中には未だに参観することができないところもいくつかあった。

写真8. 延安清涼山の延安革命旧址



写真9. 延安清涼山にある窯洞



写真10. 延安革命記念館



おわりに

まず、1972年の日中国交正常化以来、現在、日中関係が最悪の状況にあり、そのことが日中共同調査研究にも多大な負の影響を与え続けている現状下において、今回も無事に農村調査を行うことができたことは、山西大学中国社会史研究センター（とりわけ同センター長の行龍教授）の協力・支援と理解の賜物である。ここに改めて謝意を表するとともに、次年度も合作関係が継続されることを切望したい⁷⁾。

また、今回、初めて陝西省の農村を参観したが、もちろん、山西省農村とは違って、聞き取り調査は言うまでもなく、地方政府幹部からの聞き取りも行うことはできなかった。とは言え、河南省農村とは異なり、比較的自由に農村地域を参観することができたことは幸いだった。

ところで、筆者は、今回の山西省P県D村における聞き取り調査において、前回に引き続き、一家丸ごと村外へ移住するのではなく、妻子を村に残して村外で働き(単身赴任)、定年退職後に村に戻ってきた人々を中心に据えつつ、村外から嫁して来た女性についても聞き取りを行った。このように、村のキーパーソンと見なしうる人々ではなく、村境を超えて本村の内外を行き来する人々を取って選んで聞き取りを行ったのは、近現代中国の農村社会の特質(すなわち、ヒト・モノ・カネなどの流動性の高さ)を理解する上で極めて重要であると考えているからである。

なお、山西省P県D村における聞き取り調査は、ひとまず次回(2014年8月

を予定している)をもって終了することになっていることから、今回までの聞き取り内容を再確認して次回の聞き取り調査において確実に成果を上げることができように努めたい。

注

1) 筆者・祁建民・田中比呂志がそれぞれ中心となって、山西省農村におけるこれまでの調査内容をまとめたものとして、以下のものがある。

① 拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月, 山西省太原市・霍州市農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月, 山西省太原市・霍州市・平遙県農村」(北陸史学会『北陸史学』第57号, 2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月, 山西省P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月, 山西省P県の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)・同「華北農村訪問調査報告(6)－2011年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号, 2012年3月)・同「華北農村訪問調査報告(7)－2012年8月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号, 2012年12月)。

② 三谷孝・内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第11号, 2010年12月)・同「中国内陸農村訪問調査報告(2)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第12号, 2011年12月), 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(3)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第13号, 2012年12月)。

③ 田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)－2009年12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第62集, 2011年1月), 河野正・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(2)－2010年8月・12月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第63集, 2012年1月), 田中比呂志「華北農村訪問調査報告(3)－2011年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第64集, 2013年1月), 福士由紀・田中比呂志「華北農村訪問調査報告(4)－2012年8月, 山西省P県D村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系II)』第64集, 2013年1月)がある。

また、山西大学中国社会史研究センター側の調査内容をまとめたものとしては、行龍・郝平・常利兵・馬維強・李嘎(弁納才一訳)「山西省農村調査報告(1)－2009年12月, P県の農村」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号, 2011年2月), 郝平・常利兵・馬維強・李嘎など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告(2)－2010年8月, P県の農村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学

- 系Ⅱ』第63集, 2012年1月), 郝平・常利兵・馬維強・李嘎など(河野正・佐藤淳平訳, 田中比呂志監修)「山西省農村調査報告(3)―2011年8月, P県の農村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)』第64集, 2013年1月)を参照されたい。
- 2) 拙稿「山西省の農村経済構造と食糧事情―臨汾市近郊農村高河店の占める位置」(三谷孝編『中国内陸における農村変革と地域社会―山西省臨汾市近郊農村の変容』御茶の水書房, 2011年)を参照されたい。
 - 3) 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(4)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第14号, 2013年12月刊行予定), 田中比呂志・孫登洲・古泉達矢「山西省農村調査報告(5)―2013年8月, P県の農村」(『東京学芸大学紀要(人文社会学系Ⅱ)』第65集, 2014年1月刊行予定)を参照されたい。
 - 4) ≪靈石文史叢書≫編纂委員会編『靈石県郷村志』(山西人民出版社, 2011年)402頁によると, 現在, 李治全は同村民委員会委員の1人である。
 - 5) 内山雅生・祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(4)」(長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第14号, 2013年12月刊行予定)。
 - 6) 前掲拙稿「華北農村訪問調査報告(6)―2011年12月, 山西省の農村」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号, 2012年3月)190～192頁。
 - 7) 状況は厳しい。今回の山西大学中国社会史研究センターにおける打合せにおいて, 共同研究の継続は, 事実上不可能であることを通告された。

